

白杵 陽『大川周明ーイスラームと天皇のはざままで』(青土社 2010年8月10日発行)

法学部 非常勤講師 田浪 亜央江

日本でイスラームやイスラーム圏について研究している、あるいはそれに持続的関心をもっている人間の多くにとって、本書の刊行は間違いなく「事件」であるに違いない。

本書は「大東亜戦争」のイデオログとして活躍し、東京裁判でただ一民間人のA級戦犯として訴追された(のち精神錯乱により免訴)大川周明について、彼のイスラーム観を鍵として論じたものである。大川がアジア主義者として戦中に『回教概論』を著し、戦後、流麗な文語体を用いたクルアーン(コーラン)の翻訳を完成させたことはよく知られるところだが、大川とイスラームの結びつきについて本格的に論じた研究はこれまで皆無であった。本書は大川が「急進ファシスト」「超国家主義者」であることは前提としつつも、それだけでは収まりきらないイスラーム研究者としての大川に光を当てることで、学者としての大川の卓越性や思想家としての「節操」を再評価し、また他方で彼の変容や矛盾がどのように生じたのかについて、時代状況や彼が依拠した文献に即して見事に説明してみせている(念のために書かならば、これは侵略戦争やファシズムのイデオロギーをそのまま擁護しようとする姿勢とはまったく異なる)。中東地域研究者である白杵陽によって日本思想史の大きな欠落がこのようなかたちで埋められることに対し、同じ地域を研究対象として来た人間の端くれとして筆者は大きな興奮を覚えるし、『回教概論』を媒介として大川に関心の糸をつなぎながらもそれを立体的なかたちにしてこなかった者としても、本書を手に出たことは大きな喜びである。

本書はかねてから著者が関心を持ってきた竹内好による大川論をモチーフの一つとしており、1969年の講演で竹内が『回教概論』を「日本のイスラーム研究の最高水準」だと評価し、同書が日本帝国主義のアジア侵略とは「何の関係もない」と述べていることを契機として成立している。竹内によるそうした評価は、『回教概論』の内容が「大東亜戦争のイデオログ」という大川のイメージとかけ離れていたため「意外」だったという著者の印象と重なるものの、他方同じ講演で竹内は、大川には「イスラームによる世界征服というヴィジョン」があるような気がする、とも述べているのだ。つまり大川とイスラームの結びつきには二つの側面があり、そのことをおそらく認識しつつも十分に言語化していない竹内の大川論を詳細に検討した上で、白杵はこの二つの側面がイスラームのもつ「二つの顔」に対応して

いることを指摘する。すなわち内面を重視するスーフィズム(神秘主義)と、政教一致指向的な現世主義としてのイスラームである。若かりし頃に大川が初めて触れたイスラームは前者だったが、ヘンリー・コットンの『新インド』を読み植民地主義に蹂躪されたアジアの悲惨さを知りアジア主義

者として目覚めて以降、彼はイスラームのもう一つの側面である「政治と信仰が一体となった」運動としてのイスラームに惹かれる。しかし『回教概論』を著した当時、すでにそうした理想型としてのイスラームは存在しておらず、大川はイスラーム観の見直しを余儀なくされ、また大東亜共栄圏構想の破綻とともに、大川自身のイデオロギー的立場も崩壊する。さらに東京裁判を契機とした精神錯乱を通じて「理想の人間像」としての預言者ムハンマドに傾倒するようになり、当初のスーフィズム的なイスラーム認識へと回帰したというのである。

紙面の都合で一部にしか言及できないのが残念だが、他にも大川を「日本的オリエンタリスト」として位置づけ、日本におけるオリエンタリズムの再評価を促すなど、刺激的な論点が随所に見い出され、今後日本近現代におけるイスラーム受容を切り口とした思想史研究の発展を促すだろうという期待も感じさせる。

中東地域研究者として白杵はこれまで、パレスチナ民族運動研究、シオニズム研究、現代イスラエル研究など広範な仕事を行ってきたが、ついに戦時期日本のイスラーム研究との「二足のわらじ」を履くことになったわけである。それは北海道における和人の入植過程を研究後にイスラエルに渡り、パレスチナにおけるユダヤ人入植村研究を行なった故大岩川和正や、植民地主義としての日本の近代化プロセスをパレスチナ研究のなかに含み込ませることを提唱して来た板垣雄三といった先達の仕事の幅や問題意識にも重なるものだと言える。イスラームを取り囲む状況が世界大で危機的になり、日本の中東地域研究も岐路に立つなかで、地域研究において自らの足場を問う姿勢が正当な場をもつことの意義は計り知れない。

